# 風に恋う (2)

（全日本吹奏楽コンクールの前日、茶園基と鳴神玲於奈は、練習会場の体育館でソロパートを決める最後のオーディションを受けました。吹奏楽部のコーチ・不破瑛太郎は、基をソロに指名しました。）

「ちょっと一人になりたいんで、私だけ電車で帰っちゃ駄目ですか？」

ホテルの場所、頭に入ってますから。笑みまでこぼしながら、玲於奈はそう続けた。瑛太郎が口を開きかけ、閉じる。だいぶ間を置いてから、首を横に振った。

「悪いな、一人じゃ帰せない」

そう言って、瑛太郎は基の腕を摑んだ。強く強く、引かれる。

①「俺と茶園はちょっとトイレに行って来るから、戻ったらタクシーを呼んで帰るぞ」

玲於奈を一人残し、基と瑛太郎は体育館を出た。一歩外に出ると、湿気が体にまとわりつく。扉をしっかり閉めた瑛太郎は、誰一人ここを通さないという顔で扉に寄りかかった。

サックスを首から提げたまま、基も体育館の外壁に背中を預ける。外はすっかり暗くなって、雨脚が強くなっていた。サッシの下から雨粒を眺めていたら、水滴がメガネのレンズに当たった。丸い雫が、いくつもいくつも、レンズに模様を作る。

瑛太郎に肩を摑まれた。

「お前は泣いちゃ駄目だ」

低い声で、そう言われる。

「わかってます」

瞬きを繰り返して、②込み上げて来たものを体の奥へ戻す。肩にのった瑛太郎の手に、一際力がこもった。痛い。指が肩にめり込みそうだ。

「二人で吹かせてやりたかった」

ぽつりと、彼がそんなことを言う。臆病で幼くて優しいことを言う。

「ソロを前半と後半で分けるとか、掛け合いにするとか、そんなことばかり、ここ数日、ずっと考えてた」

「駄目ですよ」

即答して、唇を嚙んだ。そうしないと、涙があふれてきそうだった。

「ぶつかり合うから、音楽は輝くんだ。仲良しこよしじゃなくて、戦って、たくさんの敗者が出て、そうやって、磨かれていくんだ」

③そう思わないとやっていられない。吹奏楽なんて、やっていられない。コンクールなんて、やっていられるか。

「そうだな」

瑛太郎の掌は強ばったままだった。伝わってくる震えに、基は目を伏せた。ずっと一緒に練習してきたアルトサックスをもう一度抱きしめ、金色のボディに額を擦りつけた。

ずっと、聞こえる。

玲於奈の泣き声が、体育館から聞こえてくる。

（額賀澪『風に恋う』文藝春秋　による）

**確認テスト** 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「俺と茶園はちょっとトイレに行って来る」とあるが、瑛太郎はなぜこのように言っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 玲於奈のつらい気持ちを思い、トイレに行くことを口実にしばらく玲於奈を一人にしようと思ったから。

イ 基に対して、玲於奈こそつらいのだから泣くべきではないということを注意しようと思ったから。

ウ 表立っては許可を出せないものの、一人で帰ってよいということを玲於奈に暗に伝えようと思ったから。

[　　]

(2) ——線②「込み上げて来たもの」とは何を指しているか。本文中から書きぬきなさい。

[　　]

(3) ——線③「そう思わないとやっていられない」とあるが、このときの基の様子として適当なものを選びなさい。

ア ぶつかり合うから音楽は輝くのだと思っていたが、ソロを二人で吹かせてやりたかったという瑛太郎の言葉に、それまでの自分の信念がゆらぐのを感じている。

イ ぶつかり合うから音楽は輝くのだとわかってはいるが、玲於奈のことを思うとつらく、これも必要なことだと何とか自分に言い聞かせようとしている。

ウ ぶつかり合うから音楽は輝くのだと考える基にとって、瑛太郎や玲於奈の態度は理解できるものではなく、音楽に対する考えの違(ちが)いにいらだちを覚えている。

[　　]